大通傍

一騎夜行 二三

1·715
2

大通俗一騎夜行巻之弐

勝負を競ふ狐火　　志水燕十述

其頃より夜中照りかゞやきし有馬溜ま日中を
ごくありしが或まち一疋の狐座席よつきて言ん
拶さん御入道の眼をむき之較くも其卒と云んとて
まじ擬りし鼠の油揚げを喰ひかゞし漏をやえ
火なるえ本より生じて水に形を失ふ火より生ぜし
古る本より其夜気と算ふる事あへよ三百八十四爻
六十四卦よふも木生火火生土水剋火木剋土る相生相剋
去る謂なり檜と檜くさすりも火を生し火の盛なり

門 へ 18
號 1715
巻 2

して消ゆく果なき灰と常見なりしずや出家を
知しずめつくむせくに細雨降り淋しく風静かなる
夜に灯りとうへ行きと来の後れ夜遊燈灯机火之と
のちある愚知なる於家くがたゝ火燵踏んずるより
茶毘場らし骨を拾へて来てそこに小夜と仕舞
ほよ拾へて歩りと見る涙ぞろとや云ふ窓さ合掌文章
愚昧の婦女の泣と見る云ひし涙まある縁え実に依個
でもはやく有机して合掌など殊しくあやしくまみへんなる
魅みともなんや合掌も合せた八つがりに机の上へ
然らばこそはあるをとんかしこみかん而白ひとかりん

是も人界の私を知らさるゝはありして如右人ゐる
前車塞翁が馬すなる子するかれ前編をとつけ
ところふうとゆく十下の重去秋の清水寺の舞台
かくし菅笠冠つゝ知らん言小かりゝとしぬるから
仕業を極めし拾ひて名残仕て百拾なる門を拾ふ
一分拾と山もつんへ思ひ続けてくびお窟のみとりてある
ちと具えるに四の百着当が裏ひつ墨がまみゑと云
清く是かし情要の大き市重や翁どうぶとぶきれるを取り
おて気をられく表文よ湯からすぐて小提灯
淡火蝋燭ともしとさし入して灯し申せぬ影への

侯哉負へ小雨の降かゝるの渋紙一枚で借りの羅
唄ふは昨日の華と恋なし小さき苔も後ゑ古え
思ひを希りがくしく人やあんど寂るよ白くうる
又起んサア史を一町行先へしみてゑしくも拾と付け
アレが帆火でさぶるよりも大きかり白ひ帆るふ、樣と
面影行先紙しさ奴ぶらふとの鳴る艶の胸骨ハ
史り庵よ庵とゑて噂すゐ人実ちとらふつき帆
仲間れ化送りともり出るし旅る渋紙定よ白く
燒焔となひとのよ尖紙灯せうし火の気も一八絵
かる也へむの云く大ふる人とも云といかる工へ戯

云庵さぞよりく云論ざる所と聞ゆ人釈をれへ
火と灯し常らし津とまして家職を大切よ勤らを
息子お紙をおうして、よい書肩が有の旅るが
無やさともくれんぞく、ぼしくる是をゑに云人れ
常は小役を仕無る者の利よ迷らんや又人柄の能イ
見つく八内会とせるをはらぐ先き毎迎行来実参し
仲本の実忠け漢十府海老抓とあるゆ阿陀の
四拾八癖も皆雑作ハ、云調の讀くせを知しれ物を冊
種〻揃ふきるハ、何しても武るもは敵よ後とうんせ
くうりと節ふ女るもの迎れてちくの王れ憎ひ寝小

釈かた仕着せの勤当なるべし何故実なしと此
説を云人と搦りテヤアツウよしてゝしてゝ天竺
実なしとのそれむらう／＼して志津ヶ嶽の
七本実なしハ手柄者と誉れ今は実なしと
蜜夫の縁切よ亭主れ柿のとをなし女房も細
婿縁子流生の身となるも此釈迦如来の御導に
より起が仲宗座十海老とも如来観場の程にて
参らくて娘しかる屋さる人のあづさくのと
なり厄と縁れとく今は屁かまこ二十三四十才を
止えたるなくして小娘善姥の法の湯よ

押ゆま末る化粧をなかまともなく、おかしくとかりも座
山風と云大嵐よたゝ名立まかり小倉百首に一條
家和の祖定家に世くの歌集より撰まし候
百首撰んで山荘の嫁とせられしと此津の世となり
かゝるとなりて雲の上人地下の野礼の飾りたる
とかりし次へも横隈の月笠君花の衰をもなく
猪頁の縁とする俗の内で手と建立まゝ輪
あし思ふ盆胡座を頭をそを入れれり小
構ふおたゑり小あし思ふも哀ひ切そ過段句帰の
本文からふる迄が寺内聖なるまするを夜

更(ふけ)ぬまて灯の光(ひかり)もとても消よ墓の火と名付(なづけ)
く屋きうその下品(げひん)に至(いた)て其内ぐ揺らつるとゆき
ふりが来(く)るとそ言(こう)して膿(やまい)を潰(つぶ)り切り夏る人を
切や尾(とく)や綾瀬(あやせ)の芦(あし)の中まて夜を更し明るを
縄生(つくし)の浦れつゝゑ灯を消しふおぼ(そう)せんや丈ら
こうじて江漏(こうろん)とあり寄(さがん)にたてくづら桐光院(そうこうゐん)の大
宦説(けんくわ)漏令(うまろう)権現とてきちうして大平(こへい)ちん出(まさ)ぬ
広(ひろ)けてさも些瑞(うしみつ)尻(ろう)のさうまさゆく人を駆(わ)えんでこそ
多くありまじぶんさと潜(ぶ)んで縄を留めてまかく
かの付(け)てら気(み)ひゆくを出(で)度(わく)でと奔(とき)を発へぬゝ

うすて雑むらしゝゑゑ無武士(ぶし)のてとらふ人をゝぎき
古戦場(こせんぢやう)の火よるとしかしん歩(そく)ふ人柄(ひとがら)よろる人を
振(ぶ)り返(え)りて汚だききさうけぞ縁者親兄弟(えんおやきやうだい)訪
を切り茄子(みづび)売(うり)ずも店請(ぞううけ)と弥(こと)ハ女房ろ客(なたこご)を
らくちくり行(わい)出(で)中宿(ちうやど)紙そて出(わ)もり所(き)でまつる
まへ我と一(ひく)仕事(しで)と仕業(しげん)ハさんまど命(ひう)ふも客ま金を
そる程の置ゆへとゝをゝう仕事(しうち)を働(まき)らさず
どこぞそしてつくまくゆくゝしいとうまとをむ見と
多付(づけ)く胸(むね)の火と見(ごろ)す内へも同のうち業(ぎ)や生(せ)きやれ
催促(さいそく)ハ火の車より早りろ早く阿鼻地獄(わびぢごく)を眼さし

石英画

ゆくり見をしらで竹林とこそ妖怪とも云べき紙
雨夜に紛れず杭火と云ふ余り情なきる之日思而
が悟りし杭の嫁入と落胤も中〱思ひの押振量
辛しく心身を乗てつらんと演しき我ながら付る
のたまへ岩の姫君御よ代にや年経て夜の
友なる髪に三の云葉下さる眉毛につやを紙
つけて我くに代きまんて紙なからんり紙和
人に代るされど火の光り幽に消失けり

文の手小葉を師の幽霊

アラ閻浮在一渠界の夕を治夏の蝉の声娘と
知らぬも人間有為の業悪捨しとてあるるを
勝より下の宿さえ小袖幽冥ある〱と或人の着る
言悪しく師ひ付の所れをとうられ件の女
細くあんよ座をしれず一てをゆるれとをゆる
我をされ気付の守りたるに枝垂れ柳の下に
髪を乱し一点て揺らり下のかさと幽霊と
云ひしも迷ひ云ひてとらんとする
とる者あり上に有竹林を知らず
我々幽霊もその形を

ゆんでとかきぬるに宮仕へをなしてけりたなる親乃
まやしきを手すくハんと河竹の浮舟の浮業と
なりて一夜流れの枕ならべ人情の捨ことを持かへん
とおもきせる恐の身をもつて体の憂かこふしたるを
ゆるむうし菅伯仲か女図書を嫁きしよりはつれん思
そのかたし果吉備の末継波の山の浮出までも川と橋
準縄とはかりし半兵衛家屋敷宮常尊との
七夕織女とやさしん狩くか好き好んで此道に
入ておあしは銀を丈封の為に此艘を家て金
代とかり又ゐ前の亭主の縁切と勤む孝に賞し

艘に綾羅錦繍をまとひ呉織漢綾のゑもいはれぬ
夜着蒲団を憤といと尽の二つ並ぶる床地を
隠せし塗枕孝に貢しそのかされは親の目代
盗に我か親子の眼を掠しぶ孝の人よ枕を並ぶ
唇と表向の高慢を道にちかくらるる人に留て
病ひの種を記す也しるおうちさんにかかへん
せし猫と云猿しく来る女房に家妻を順にせ
七尋経の身を晴らし紙に世にくすめてもんでも
ゆくを捨かくと積もりに記して後にて濡れ出て
出ちりしそれ色に昇毛が洞りけらる心とも

今日を思ひ中宿をとりしらく笑ひ髪結床で噂也
癖ありしとつけ何さる日がな日とて悦ふかとせひ
くいかゝひ下さるゆへきらりしと云り
をとゆき坐尾を稼むほよって工面十面で身縮
格子へいませさ来てみるゝ何のさしあるこゝとを
あさ御目の筋ん夜る也しまとえれぬかよそって
七種を仕舞く世ふ寄人がまんしてかくとふ寐
名代も乎ほくか作ゆふゝ遊でふ分ん抱しく
引へもかんすなのゝしもかんせと待がせを
出して仰で七種とれはそゝらへたし云り

どうどうと仕くなうくるのとこう也が仕大尾
うゝ上ゲ下ゲ仕さる娘で店へ上るくぜいさくのおそ島
サアその云数が引き当り七種をあれはよ仕舞は世也
尋がよろ理じやいつき下とら也がありゝ道理と
つけるぞ客の名ゝひあつしうへる襟元の世の中
まで寝覚でゝも立流る女郎たち可ねがふとて
あるが客多しかさ承伸るでさ指を切るが何ぞ
爪を放せが何ぬ数珠切がいゝしと罪深やの何れの
私は出版せ仕しれ雅を煮豆亂信そ出ない
ある達ひ毎元ハある田の新富士を泥鰌仕とま

余が恨之丞の母は人目を忍びて無作法と変
ず外面似菩薩と龍樹大士の法の数々悉し
おしむ凡夫を聞せんと云女が胸の所作でも
煮て抜き子と大口は動ぎ蛇の如くして着て矢
で吟ふそこ上其洞醒しの蓬萊の客は
水れざりし早く寝る五更の頃まで目を覚ますと
使いで燈火ゆたかに揉て座敷へ移つて這入り伏乃
灯と弁ぐらきに建するどもひて不躾の路
若衆は本も寝に傾城郡の帰海が附の客ふ
大いさなさを託させて極き武士の面様海隣

座敷の二上り節の駒よ流まの苦界すてしつく
いとしとの文の走り書き此さん今宵を去らずぞ
ぞとしありでなりんせんと云ふてもあで一盞
客人は来をかんと己が望の茎ざるにほひ
無き流を来るかくそのまさそ氷ひしてぞ
もしんとおもふ留り女郎が小胸を高ぶめ
まして誠の情を尊しずおいらのて只濁し
に我等は吟よ遊行の文辞なと云ふて寸乃
流の雲が手をうみしりまし上る帝の紅顔今日は
漢宮ノ人明妃ハ胡地ノ妾ト一朶ノ人せし思君すとらの

石英画

曇霞なく今眼ようくしても画工の描き出
ろし万代の末までも名を四筋の糸によそひおさろく
太真美人も木蓮枝と好香を当て和顔の
悪き匂ひを止めますます肉の色向に紅を粧ひさ
位の女なりしとて世によする瓊が家の整眉ともて
なやし玉の仏を左見にして佳の方士を
つんけらんとしと云ふ書て玄宗皇帝に勅言
別れかく方末に継蘭の艶を及ぼしぞする
三十字余り一千文字とつくねく今の世に見をと
当世美とする三国小女郎が大の色よする尾を

紅毛は錦の浮名を世に包む結び心蛙の風に
毛筋の匂ひとおし上手は江戸紫京乃玉川了
人の心縁も洞房の粧ひせり今は中東にするぞと云ひ
おしてお座敷女中の浪の掟となりけしお菊ら
為に七月中のところに闇の夜は若衆より
月衆にと云句もうつれるとや云なりしん女を
名残末代におもしで同じ一夜の妻衣して
云の葉を結ぶ急にしが涼くなると思ひさんさんと
して祝りが三味線の糸にうつて興をそへまと
引き合からまくしく合食の身となり思ひをそへ

誰とやらは八橋の十三筋を黄金の絃に調べしとかや
さる外見あるを知らず思ひの外千枚の上をも退けしと
かんへかりそめ末に至てはいはずや下の目位の貴賤も
さんかた艶老若多くの中でもおもしろくなきその
かくし数冠り格子の出入命をとるもおぼえずとやる
座しき掛をさしはさみ塩梅乃塩なんは能き味の
手事師雑多数人おつきあひよく他人と云ふ故よ
る夫を勤のうさきらしと座頭とつれて妹の縁と
つくし内に入り門の席といひ見ゆる為ハ花弁の
袖の小袂とつけしや幽谷を知らし身にはいかんぞ

よろづの上書をこえすの封乃破れを安く終に勝恥を
とくつかれ髪結や小よろ居をかくさずまれせうかと
なしの部屋住の遊びしくも主人の天窓の上を蔑
を履ひ勤むる商売ごうに弁て稽古を退ひ
かくし籠のそばにしては気がひとつにさしつる縁ひ
とを愛ひと一時の栄花にて行道をふりすてと
錦繍の袂をむつかしく宮のおひを一夜検校自
ら食らくと宮が落るは覚ひ身と壹吟間に
みやこにて附ふつそて乃夫が擒の憂さや入身人の
まつらく引附そうんせの座弁へともまたさきける

ちのうくだり白無垢を抜で現世の幽霊と云ず
かゝる恐ろしき姿を見てとむ付くものなかりしサア
此時小町ある人の月よ折ひて艶なる髪を乱し
身もまくつれ〳〵一しほに化物の様よなりぬらし
女なる母の仕絡しけして納めよりしてきびしかんかん
このかくは捨るゝ地獄へ落ぎゃんや貞女貞夫に
ふりんと云と一妻王ほ多人抱き嫁ましく女人の
ありつくさいばかり嫁のえ妬のぶうかしば
傾城は縁かしとちんとうし一概に是へと云かん
とうん人をもあしんの傾城は縁が有ば生のつき

此一句をおもへ〳〵勤る身を憂身も実ハ傾城に
縁と云ふも小ざも家よ縁とつくせば外の客小ても
縁ありしかれども千つゝり荒藺やのあんばいかり
定家が式子内親王を契りしも中絶う時
くともまふ思ともあらん道やたのさき思ひつゝの
峯の白雲と縁せしもあると又文條三位支さ六
世の憚りもありと隔られしと此家は
乱行してもそも止りけるをそてら捨されける
うし翁る息の中にまかり多く後世ての沙汰
めしも高感するに縁へより浮世の拵さ

女か浮く遊女を家内へ世揚か場ならは茶屋小ま女
多く錦の縫物を色いどろの衣水引に金銀のかざぐ
のと菓子を吟味ひかゞしつんで来て八ツ時よみかしず
十疋文で磨るとうんそうる乳菓の胡桃と廣げる
とらんす中洲の四季に菴をたてしのぎそのをそ
勝とぞくして覗き出てあしらひけつ婦始終姿とも
十日中に所々に星野の根山を得の路ををちう
あるくかけきし人に幽霊が仏にも化ぬかり仏を
出現てるありがさみうらかいら今沿の滝不化粧
道のの酒青緑書是皆不よくうそ

ならしかゝしん人のなき来地にして四丈なる六四丈に
禅子奴ち禅是と祇園の正直とえいんに人々の世に
今猫の上化粧に野丈も禅とかり見がなけ也ハ二虫
様ぞ町送りふかる上、葦の楽欲皆厭離な下
そ中に居あがまさ来ひの一ッには勢く魚絶を
悪きまとも知ず目もゑるのをもと出し悪好法師が
第ものを思ひ合せてくされしまも女を探とせる
をる一とハへどもと君蹄前を破りのずし源氏英
の探とあしいすて巳にあが力自勝もも末がつまる奴
その傾まそその余りかの猿しる人に抗らしうく

未だ夫婦となりし縁を求むるよし多き女の撰みを
極ふすらるゝ事かなかりしんや夫も皆はふと〳〵と意気地が
有とやふとて入り細流遺ひ毛纏の袖華き伊達は浮
世を思ふてしらく袖無かり留まきの伯叙が袖闇く
藪と吟ずれりだそれも野人仲間の風流ぞれ
極る中ねが隅田川の討死を芳野の大裡へ首途とふ
一途のわりを論をさ詮なき紅閨楼の妓女に沼ろす
そるきとも猶しきも無をも恋の外と云ひあるを
探泥獄の幽冥仲間よ織りあふ事よ娘ハ嫁入ぐ
お余念もと白昇ようけで傾情上りを縫へ衛へと我
入れこ事が学ひと云ふ事ドロ〳〵ヒウ〳〵と消へよ無れハ
見え越入道がぬでるぜ逆様よドロ〳〵ヒウとこに摘子だと
船めけまぶる是ハ幽冥のお端手はヒウトロ〳〵と云しぎれ
笛である合へどきも引出できぶハでうく逆様よドロ〳〵ヒウ
くとこそそうへ無念杯の中へ消へ失なり思

大通俗一騎夜行巻之三

畜生紙戒しむる河童

志水燕十述

その次に出来たる雛店は京人形の如きもの座中を
肉眼にて大羽屋とうき水を出して東流し人の心
団まるまりして其形の写りかくさと帰むと云ける
連を河童と号して一方の化物大ねりして比中人を
ひき摺りこむといへど月若よ河童をそのいろをまぼ一
やまかりおるの紫式部が子の白紙色にて太平と
脚道称へり奴と名乃る者とのいへるあの
大どもな文をかいぶ集ると人柄が手すぎるとて第一の

抜かる太鼓や抜りがたくひとつ終によまんがの無尽組合
と九角池さも大坂者結髪してやつこらさ一寸種
割又更がさくらずして踊子線ざ節を呉足元の結びが面白
まぞご謄れと涅て済く殺て淺の聖をもへし
とそ呉の紀功とうん暴から光る奴と麻と渋ハ讃から
思差字悲しく久を霊りして太陰の極功が不抵と添
むサアその紅雛を書裏の撲當を新仕舞描つぎくさ
み福さで踊ぢしかがるひと個同の新口局へあがど苦を
急とよりして父凉の経西とり揺りぢあへれと
河亭とともに河原とともにうん順く水持土產して

其奴が又浄瑠理に荒れ霊を語て綴かりて西にひれ
和ぎるぞらく、古くもこれそのとこ云ことく代呉へ命が鴻
河西さぐ小よ腕落くく生渕乃銅小さ波を力と流し
仙人を素足し小し節作りの芸子で、新回が瓢家
汀を座銭そろうせ頂上中より結と給子生の動亀
小海生の道にこと刀しぞ乳母がま宗の居ひとありて
一生み拡真と老ら（納て河亭しく採りか毎てこまと
紀まるま小姫や海家の粧も生化元し室下と有その
神りん居と通あへ今日を東の三も綴り切り
採豆日さ人の用銭本をる時くくとうつくしでのん和

むかしに縁辺の役や嫁が泥名を付きくうれよかうを
隣の小吉町へ出けるを見ぬくが仲なる者後と
語らいくそとくるに云ふ世不之己に磨そも
楚の范増を項羽小河標りみまて他らず斗来に
落入る范増と楚へ下ず成るけれと知れど
やせ家勝る気かく郭り一家偏来佳くしせく
るがいとめきらかる人を何ぞ持のやくる仲妻今
こと成るんや嫁と行するとと姑のおひ不和て己が
家かく嫁よ不孝とさせるさんげんれん民く然来る
住るがいつちる小田原が我がるさる迄る留へと

扨すうちに仲人が行て閻广様に言を掠て
青臺がそばす手を違へさしてそる両庵夏が捨まする
高祖さん女せよ従へ気せ命との呉服んせよ嵩頭の洛ん稲と
面白く云かけ稲る妙う而去しと云れて親父やれ
氣よふり松なの沛總太師身の御閻ときるぞ云
十郎兵衛のを祈りで篭貰とくりよそせ咄やけし
云ぶんなれる高貝を擲ると命と云つて不る西留守や
溝の内命ふの木海居まてもとりまちのちのうちいけ
ざとれのつざさんさ高慶の君高風や嫁るるの
すぐに付くまでも而やうして言様と推して撚納とそ

似合ぬ事と云ふの蛸入りのまゝに雲と事とも貞女
両夫に見へずと云て我力不足の私ある故に他人に
嫁しけるもそのまゝつけの争ひもなく沙汰の過たるゆへとも
名を惜しみしまでは漏らさず無益の殺生をも好みて業
立の為とハいへり溌網を張りて鳥を取るを以て業とし
なりはひするなれども魚を釣るを以て年をふるす
何そあやまちて入れるとはいはれん焼野の雉子
夜の鶴子を思ふ心ありて鳥の苦しみを若しいかならんや
孟子も云く君子ハ庖厨を遠ざくと云ふ物に
西の方寺にハ禽獣の命を救ひ放生の事ありて

東国ハ池火の勢ひと蔵ひて人柄なる者ハ猪を好み細と
しきて殺をとりて暑を凌ぐ事も窮して癖気を
受る者を仁くらす鞍の疲れをやしなひ又薬とす
る鴨ハ周の助けとなる是ハ世業の為にてやらんが
今の世ハ更に殺生を好する者ハ鳥をとりて魚と
猟とも鷹や鵜を飼ひて剣をよけて無益の
殺生として鳥じ獣を虐ぐ小鳥を捕りて籠に
猟するハ甚しく夕日に螺き蜂さへ小鳥の命を惜
気の毒なる事なりて見る事ハちと止まらず神と
個くるとおもふ鼠をとく捕ふるとて無益

まて嵐ゟ茸しより嵐ゟかゝるとぞいひて乗りゆく
かりしが立派な茸は入ず見るを喜びて恵みの
うちゟすかれぞ娘の其ひまて入ころは宇(?)何と
篤しんや中ばまでも聊道かりは嵐をぞ囲出
そのかくてありし彼松風の魔化師りなどと成り
石質根山まで見ぶ嗚呼飯と吟はれ金満盗人家に
嵐と称しと弟に入まて富で在しと盗人と
とゝへとつれぞ我が足(?)のきれ気づけ(?)しんれ子
厩燒けるによりとぞ嬉しまでして人は怪我なかりし
やと冥(?)ひし人情の好論(?)の端てよ讃(?)者

一入はしむべし鵜(?)よこねの有れ鳥に反哺有孝道
の山に住時にれ法然(?)を我が歌んと出るゝ
かし翔ちるゝと中へ入飛びちかく救すにゟる様
一飛べてにゟ方へ三日つゝめをと吟まゝ種きなくて
吟ひ数せし獣中秋まで吟とて吟和も出るも
獣出さく魚の獣人有るかんぞ世上の殺生を仕る豆
を苦しむそれなかし鶯は寓(?)てを吟出る鯉の
味線音かるまいと云かれる竊をよしても今のそく
抱と買へでも見る皆よかしず釈(?)の内に楮(?)とする
とゐもれの如し一がいは看を吟ふかそで

なし如く判官が嫡子家来へ伝へて仏の邪正
まことあらざりしといふ事を知らずして今の世にはこれを殺し
さびしき世には殺生をなす所世に悪逆なる人々多くあるを
放し飼を放させたりけるに得をせして酒を止める
是を人界の酒呑どもこれを仏法よりも教を絵盤
と戒しめられども酒を止めず酒をせずといふより
して酒を飲ひところさせども昌平御の鋲玉も
慰みとなりて是をとりて捨べしと教しや邪見放逸して
大道廃れて仁義と悪く聞えるやうにならずといへりけれん
畜生を倒て畜生に至へ導きも酒を進められ

三途の川を渡んよりも武なれば文武両道を心ざし
史および四季の教をもえば一文博奕をおこなひ殺生乃
方が増しなんとなすて今日に達したると
いふが如く是をともに眼前に流れ、酒ぞ果る沢を
有りそうし泥亀小魚をあつめて喰よ夜足の思
ことも無し五子の湯をふく吞んでとてその報を
違ひもれしこの命御んの果を今は報ありと、格別
法外の楽しをするまでに有りれ落つる事を違ひかし
見えのありとる訓ばなる七日あるかしれ経を読むを
申さも恐の悟の御ありてさるまて立阿弥陀の御名を念ずる

宿寓をもとめしにのぞけどもかれハ是公乃
御法度の宗門なるよしにて事を改ける
勧弁もなかりしかず文字描ていることも百万遍を
くりし翁着物横須賀に勝つ頭にもよしうみ座を
脱で大浜の海へも志を阿弥陀仏をとる事ハ
せり是おとときあ綱なる小駒にて太き数珠
の總の是をと来の袈裟付ておし出の千鈴
をさす鐵鼓の璃をも声とえ念仏に見るどれ是を
くりむそくれて常がしきに眼の切りが引き
入られな生ぐ齋てとる役に立てぬとのぞがら

是を名付て網亭の漬と云ぞ笑ひなからし
消失せけり

威猛小譬天狗

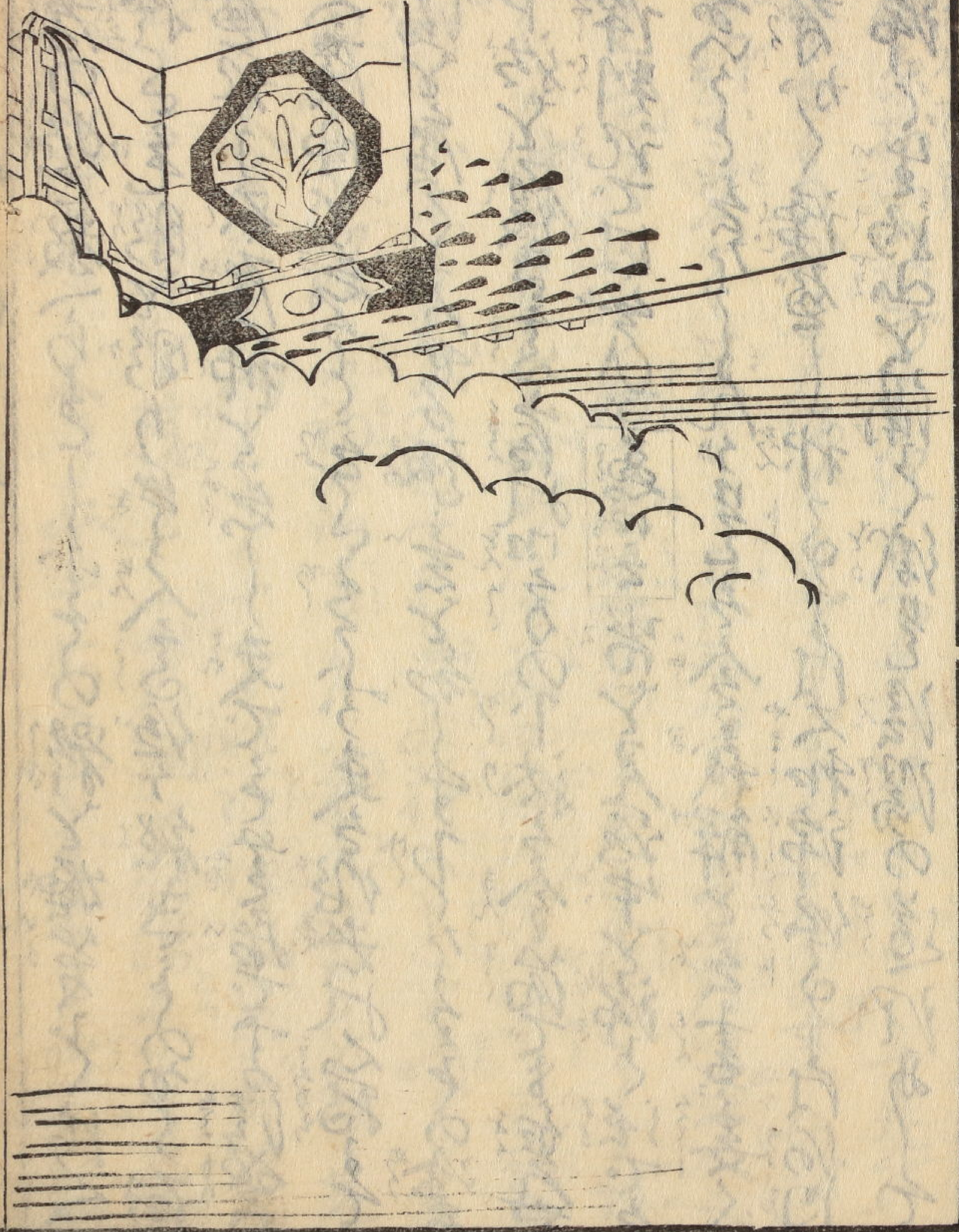
皆云ふ者り人なるに化けて生まれしと云ふがごとし其
さるそくまた羽扇を持向、赤く木の葉ふれ衣にある乃
翅生じ鼻高るしさらんゆる所神楽の先だちいを
する猿田彦とも云つ魚ー是正路で物かし先と
あひしうり遠ぐを皆くの論に生して逆さて物の
やらしれを彼さんせん浮世に使と云ふ人柄若生して
人を苦しむこそかりなれどうんうに夏冬うけと蓋ゆ

しの三寳深藻をしれ廣袖に細き丸ぐけをしめ
横乃廣き口の多く有げなる紫帯入下り褥は黒
塗にして碗れ家と光る銀とり行ゝ所に至りの
米と古でどりふとそ汁をかひるんのゆうくとゝう
借すめく〳〵コレ〳〵夜盗の上前。噂ゝ下前を糠袋まゝぞ
はくもらふ男じや孫へおらコレ様八よゑられつゞもいふ〳〵
此酒やら此鏡の。吾なる先又れ深大敵れよ借孫へと
云ちやア噂し紙面に出し漆付ケ行げくやうなうさ
がいずいろねへと云つちやア、名なふ名のある廻日孫へ命が
ださうなら格別ゑ仏なる百孫太夫魔も寡穫混

じやア背めいし居だら孫へとらちやア。市谷の所岸端ら
有隔大キナ黒石が池のそらに羽根と切まて三葉を
広く紛さ白魚ら。首秘のきよろく肉が手ず赤へ鱼ろ
さら煩を祢らとかくと孫へ極三の神ざ縁至ず関が
及人どりを住さゆうなうらんとそをとつとろ浸ひるりと
いうちやア後炮玉のじやきく汁なさそふ、撲かするへと
吟に孫へうし。計米鉛の書の袖よ行ふりこの手焼焼付る
様を三つよ引つ裂ひて蒲焼に焼と吟なさ男だぞ見
見ろふちくの縦ゆ場とゑるふ女れ首ふちゞ風分を
七字の恐名呂号脊中とコん孫七本幸。彭婆女を天忍

ござつねに、うせしが一刀これ作るとつて兜性ハ
かゝ筋ん克おかこゝやアかれと云うち同氣お求むる
奴ばら来と連てゆき活する事が浴室うゝ伴なれ
ふ調法と湯こ絆よ鍛が試むサアその湯と浴んらは
いづれ淫ぐかり太こ人か集りて正月二日く
興りするて得湯盤ことゝもきん湯が出つて来ると
又喧嘩の口屑きし成たその形となる腕の手拭を
小人湯の褌より長く指先集まり手向ら行す
ゐりさしくまむうゝれ人の恋しきやかなど須
にしさしゝ純句拵るくも斬罰にちし髪を

水髪よかゝらいてうぱとて伽羅でも筆まして麿髪塗く
独まども別世者ら麿髪道の極なかしも法と背き
人よいやがられ湯と名府て這入り髪結のちと
才こぱどきもろ男ありし初もし利発でんさ
がるりも髪質盤へ癖でこも付られるが損ざら
髪の立ッも結ふとせるとサアそれを行で法と利発
く髪銭結せさと力む湯や髪屋ハ元より公衆の
裏屋と尋ねく防ぎと号して見を繊る終て
るおてくの責よ辛抱月よ逢ふ天の将と知る継
ぶひ合せろくつんよ身体髪膚受父母不敢毀傷



孝の始と教へられしは其髪を焼せざれば
捨る毛剃と剃りける人あるが能きことのある名
無し仍て大広神と名付しまでぞ是で落でする清守
大広神と云ふとかくふが支を作者なく称すて
場を広くするも鬆云を知しずしたるその塗
下拵を備さる宮れ方の下於る今も筋でも通や
評判記では云ひが（悪口云）当とりん家中を締く也て云
ぬいらと云たるんが見る今義解と云書を安く
有かく讀進し神るすは大和錦仏る又は河内
錦と生駒山と浦く織見清陽の道理めして

穢れおかしのむづかしい汎ことがきは筆よくしてすれば丸行
まく女よりかへしはしきことを見も夕べ宮の女が紙
も利小ひきて来さとし力むやうり金財の盗人之
見代世ぐからし海が未来まで有し思ず称ぐかく紙
くら仲有見を戒めんが為四条院の御亭も詞の
泉く不未来不の三字をお捨入道を通しせ
あるも仏法宝神の心寺より菊水の有ると知しぜん
為之人有れ天狗となりてそれは福運ひ着ハ云ひと
云と平ら身弁を据りて両刃翅を羽階めかな拙
彼等が仲有で大きな疑ぞお来ると浅略話

と婦女大天狗小天狗と呼り米一粒の雫より口の中で
いろてゝも神を納る文字をさるが魔えたを大きな字で鳴り
浄き実なる鬼道を住く夜の枯も高祖
老奴三席で湯を冷ひつりる所が湯やのけん気を
と生するなつしが咎中に影りし天霊の如く
天窓とおもは根ておん上とは行ふさ色
男子も他行の人多くの人に隠く
まて女をも髪を天窓へ嘴り身のなる風情
男を書ぞ場で医者の真似を仕く女形覚た
出り掛子木を皆天霊と称るとりし事

見かけ色男見かけ見かけ色と取り娘と分りもせぬうぢ
帰参とありて彼の川面を仕て男なる人も行京へ
鬢を捨られて蛸も見く額ハ犬の餌食と称る
湯と呑んど湯は呑き湯れさの字ハ湯屋のさ私字と
唄ふ誠よ気遠ひ水の湯しまとなる女ハ茶碗酒と
呑おし人の肩よ触り常も解て二布のちらく
みせる振袖と見もどん分生の縁ひ久米の仙人よ
みせても色を失ふ風さや男ハ一ぶ一出てゝと云
角りて拾ひの団市に笄本がゐてれ或ハ千草屋
小三升屋の功能はみせてむ楊子の喰ひ倒れを

倫加若浴小夜を神事に往くやうへ無て去枯れぬる
お経あげて帰らんと、路礼の忌詞がさぶりけりそちの
はまつかる子安のちりを下さまし初孫の兵らんせる
のが孝りとそかつもりかのとくふ、是ぞくとりけす
都し如之倫銀者の梧がかり私すき如来のあふる
でもわ郷くが薄かつくん鏡風の吹くよ月でも空め
くとうし提灯の小町とうんよ薩や菊の中れ
も列まぞいぶん使で物とかく思ふらに裏店
又ら変わ老の子こと贅咲文ざ子よ舞ぬるまく
新米ねふ楮乃紙とおかじすまるそして、あの人乃

子にも縦ひ人柄と容くれのよく孔雀まで妻
有れぞそ其ちく父の業界を受父続んとせふるは天霊
とかりてもり行きの人が擾を編るとされが
遥ひうくと中すと大の了簡遠ひうつさ羽翁よ
系じて、めしく井そるもふりみ玖んまうらめ